

# 上の二山！ 本校の先輩達

## 荘原小学校校歌の歴史

▶ 昭和三十年の様子



本校の校歌は、第4代校長である青木清吉校長の時、昭和30年(1955年)3月1日に制定されたものです。その誕生までには、様々な変遷があったようです。

本校には、もともと昭和8年制定の校歌がありましたが、戦後の新しい教育のもとで、新しい時代を切り拓く子どもの育成を目指すにふさわしい新たな歌を制定したいという青木校長の願いにより、当時の県教育研究所の所長であり、本校卒業生の須田正平先生に願いを伝えられました。

須田正平先生は、「他の学校の校歌は作るが、母校の校歌を作るのはなかなか大変だが…。」とおっしゃったようですが、「卒業生として、いやだとは言えないから。」と、この依頼を受けられました。その後、須田先生は、作詞づくりに懸命に取り組みました。何度も何度も書き直され、5度目か6度目の作品として現在の歌詞が完成したものです。

作曲は、青木校長と須田先生の相談の結果、当時東京学芸大学大学院の作曲科主任教授で、島根大学音楽部へも指導にいらっしゃる坂本良隆先生と決まり、須田正平先生からお願いされたようです。次の歌詞は、青木校長が、昭和29年7月20日発行のPTAだより21号に紹介された校歌の歌詞原案です。これがもとになり、現在の「荘原小学校の歌」が誕生したのです。現在の歌詞を思い浮かべながら読んでみると、興味深いものがあります。(以上は『手を取りあって』収録の座談会「平凡な教育を求めて」を参考にしました)

### 荘原小学校の歌

昭和38年「荘原の教育」第39号(7.18発行)において、星野理喜弥校長は、巻頭言「校歌の心を」で、校歌に込められている心を次のようにまとめていらっしゃいます。

(一)  
 大國山の 空はれて  
 朝の光が さわやかに  
 丘の教室 照らすとき  
 清いまなこの いきいきと  
 今日も心の花ひらく

(二)  
 湖水につづく 青田から  
 ひるは 緑のそよ風が  
 塚の木立に わたるとき  
 わかい力の しなやかに  
 今日ものびゆく 背のたけ

(三)  
 ゆたかにみのる 千町田を  
 そめる夕日は なやかさ  
 友よわれらが つなぐ手に  
 かたく結んだ 友愛が  
 明日の世界を 作るのだ

#### ◎ 希望を胸に努力する子ども～努力をする子ども

どの子にも、よい子になれるという自信をもたせたい。希望と自信をもって精一杯努力すれば、何事もできないことはないということを体感させたい。

#### ◎ よく学びよく考える子ども～よく考える子ども

色々な時と場に即して、最善のあり方を自分の力で考えていける力や態度、習慣を育てたい。

#### ◎ からだと心を鍛える子ども～体を鍛える子ども

真の知性、明るい素直な心も、体を鍛えることと共に育っていくことを自覚させたい。

#### ◎ やさしく仲よくする子ども～仲よくする子ども

一人一人が個人的に、よい子であるばかりではなく、学校や地域での集団生活を通して、優しくし合い、仲よくしていける子どもに育て、社会性を磨きたい。